



atsushi suzuki
1973年東京都町田市生まれ。趣味だった革細工を、2009年から本格的に仕事とする。10年、11年クラフトフェア松本に出展。製作活動に磨きをかけ、現在新作を考案中。日常で長く使える“モノ”をつくり続けている。



縫う前に、まず針が通るよう穴をあける。フォークのような形の道具、菱目を革にあて、木製のとんかちで菱目をたたいてあけていく。直線は、刃が5〜6本ついた菱目、カーブでは2〜3本の菱目で根気よく穴をあけ、針を通していく。そうしてできあがった作品は、とてもきちんとした印象を受ける。

「革なので、使っているうちに身体に馴染んできますよ」と鈴木厚司さん。バイクが好きで革ジャンを愛用し、革の良さに魅せられた一人。最初に革でものをつくろうと思いついたのは10年前。バイクに乗る時にぶら下げて使う鞆をつくってみようと、東急ハンズの革鞆キットを買ってきたのが始まりだとか。

「その頃は、車の整備の仕事をしていたので、革の鞆づくりは趣味として始めたんです。まさか本業になるなんて全然考えていませんでした。しかし、もともと、子どもの頃から伝統工芸に憧れていたという鈴木さん。この道を考え、木工の職人さんを訪ねたりと模索していた。「訪ねた木工の職人さんのところは、分業制でした。どうせやるなら、すべての工程をやりたいかったです。そう考えると、革の鞆づくりはびつたりだった。一大決心をし、3年前に革鞆や財布、キーケースなどの小物をつくるのが生業になった。作り方はほぼ独学。」

「革靴をつくる学校に半年通ったんですけど、とても複雑で難しいんです。でも、型紙づくりの参考になりました。」
つくっては改良しの試行錯誤の連続。例えば、鞆のカーブ部分。つっぱらないようにするにはどうすればいいのかを考え、ていねいに切り込みを入れることに。鞆の底の部分は、一枚の革を無理に引っ張るのではなく、手間だが、2枚縫い合わせることで、つっぱり感をなくし、強度も増した。もしかすると、教えてもらえば、すぐにわかることなのかもしれ

ないし、違う方法があるのかもしれない。でも、つくっては考え、つくっては考え、をくり返しているからこそわかることもあるはず。それが鈴木さんがつくる革小物の味わいにつながっている。今は、おもに各地のクラフト展などに出品している。「お客さんの反応が直にわかるので、そうだなと思った意見は作品づくりに反映させています」。長財布が入るコンパクトな鞆が欲しいという声があり、長財布と携帯など、必要最小限のものが入る鞆を完成させた。鞆だけではなく、コインケースやキーケースもある。中でもおもしろいのが、野菜やフルーツの形をした、たべものシリーズ。

ひと針ひと針
さちんと手縫い
ていねいな
仕上げる革鞆と
小物たち

東京・町田
鈴木厚司さん



「はじめ、左右非対称のコインケースをつくってみたら、リングに見えて。じゃあ、いっそのこと、リングのコインケースをつくってみよう。それから、トマト、ナス、イチゴと増えていきました。お客さんの中には、お店でコインケースを出すのが恥ずかしいという人もいるのですが。」
いえいえ、そんなことはありません。見るたびに、その形状に思わずにっこり微笑んでしまうはず。
男性におすすめなのは、革でつくったバイクの置き物。「ちゃんとハンドルもきれるんですよ。車の整備をしていた経験がこんなところで生きるとは。」
人生に無駄なことはないということ。これからも試行錯誤を重ね、変化していくのだろう。その変化に期待したい。
十三夜ウェブマガジンより転載